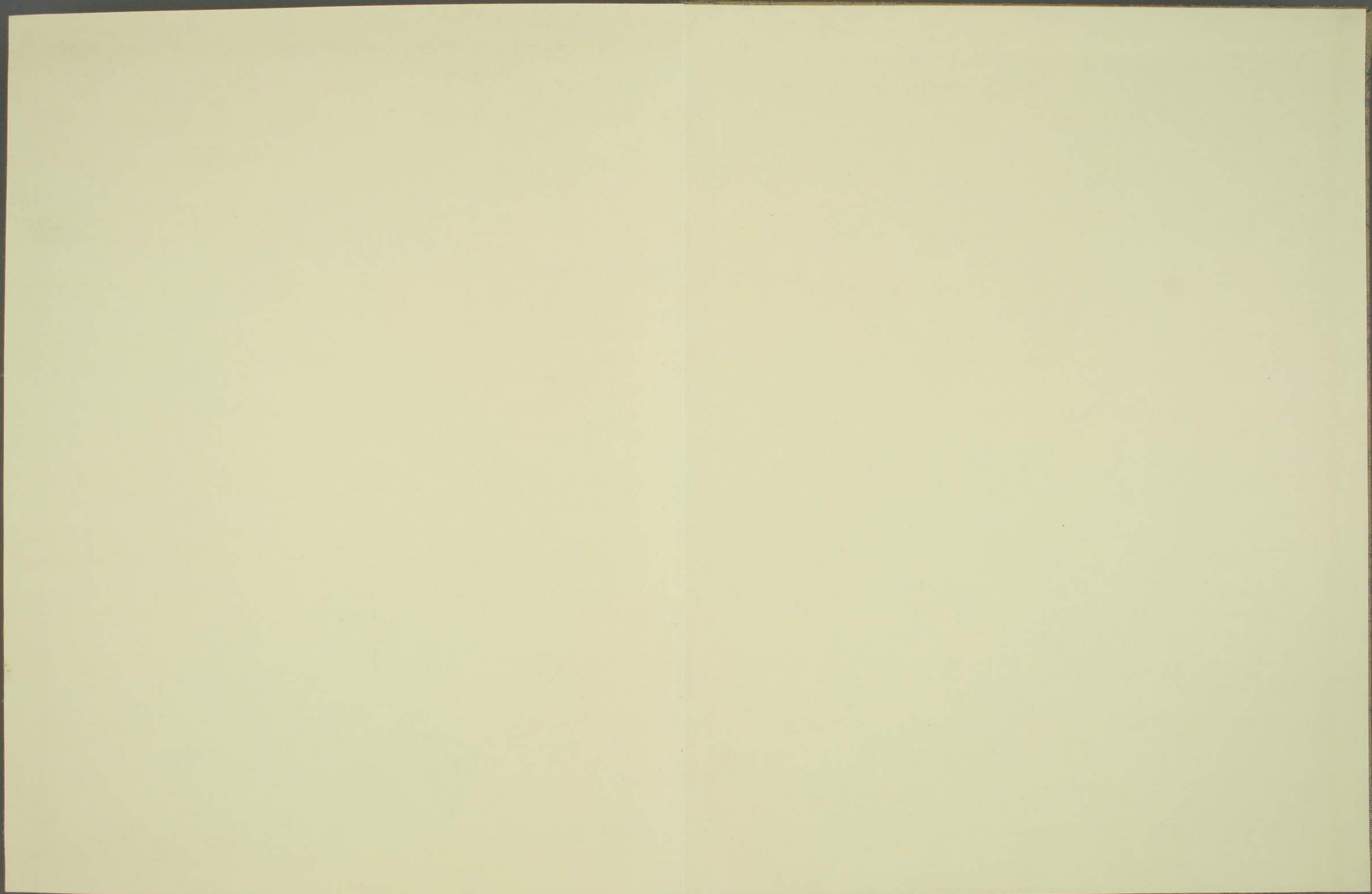


時間

横光利一

特別
~ 14
8085





出すものは
た
黙
つて
し
私の袂を
ひつ
よせと
ふだけ
のびな

足代を一足せうたに
していくのもすまね
私は袖口を世賣つた
分は御を賣つた
海へいくこと
思遠はと訊くと
私に皆を動かす
初めえそ
一緒に逃げやうと
そこのははるかに

時居を
から

何となく

一行アキ

一行
アキ

珠
に

ふことと決つてし
こいよい子逃
海に沈つた
人を背負つて
舟のなか
一人つづき
舟のなか
舟のなか

中央公論
1466



松論 1469

ては

松論

折角連を逃げやせむとて皆を納得させたる
 にも今さらう白名を連れりかやいと云ひ出すの
 もこ小も勝手からおきることなしするのび、
 もこ波子のことはそのまゝにしてをいて私
 雨の降る夜を待つてぬた。しかし、雨は降る
 まわのこ小かちとひと通りのことでは
 の待つてのひあふ。誰か錢湯へいよく
 にも物を一枚買入してめんはんを買つて來
 て分けなうと云へたり、五枚一枚買
 つては錢湯へいよく金を遣つたりして
 なる

松論 1470

いふことなつて

朝から

のわかにえのちらにいつわりして
 何にもなうぬからもこ煙草一本さへ
 めぬいゆゆりではやい。はんたつて一日に
 度で後は水ゆかりでござる。轉つてぬるり
 仕様かやいのた。ちると、
 三三三目しそ朝から秋雨が降り出して
 夕なになうとまますすひびく雨風は文つて來
 た。さアいよいよそ小の今夜こそ
 出さすと塔ぐえは小水舟を定め

にちのいひ

にはねたの

一夜の来りうを待つての
 着るたとして
 逃がしたとして
 四人の女に八人の男
 の中からつと
 くて
 しくは三人づつ
 かあつたから
 北はいつ小
 思つてお
 ところか
 にはねたの

オア無事

一緒

逃がし制限が迫つて
 を現さぬ
 ら下げた
 思つて
 手傳ひ
 杖か二枚
 ちして
 小の
 孫つて

孫つてわな

時辰

そんでは誰か
こなか
して来た
ら
ても
中
人
は
持
逃
気

澤山揃つていつては貝附つて
一人づつ行か
ひ出したのべ、
にたつて
十回紙
んか有つたつて
うしから
ふと、
ついて
気がつ

一人に許さ
し

へ

ら

一度植
えつけら
小と不安
のため

云ひ出す
ヤ
すも
パン
を
誰
さ
誰
病
を

私

病人

出
暫

けいれいも今からはずもい高きところか進中
 つのすきはま明日から水ばかりより釣め
 いめいからひと思ひに今夜のうちには
 越してしまへばいかに
 の方がいんたなつて、そのおまするずる一
 は中虫の長いに聞のゆへ動いていつか
 女達のあんこの出たエルトかび
 ちやびちや鳴り始めると進中ではなにかと
 気になくなり、ときどき
 はえいたんこちやうに後ろを振り返るとまもあ

中央公論

時正堂

つまか、もし進中
 宿屋の気味のつと
 ても直ぐ
 かつた道にたつて誰も一度も通ったこと
 のあるものはなにかから
 行くさうに何かあるのかどこ
 にごん煙があるのかそれもおうが、雨に洗
 は小た砂地からしきりに頭を掻きわける石こ
 ろ道がいくらくも足さきでいすばんやりと

中央公論

か

時正堂

初めは誰もどうして急にこんなことを病人か
 んひ出しぬのか分らなかつたが、その水が病人の
 血液がでて来たのだと
 分る。一同もぼんやりとしてしまつて
 田方には分らん。雨の中
 乾いた布をか入用だと云ふの
 白い襦袢を脱いで渡して
 仕方がないから
 病人は氣の毒
 かつて、松木の橋の上で自分
 變

脊骨の變

をここへ控へて、
 松木か
 一層深くわづら
 しかし、そんなことやりも
 追平のことをあまり考へなく
 腹かやのへ来た。一人が明日に
 て所へ着いたら、一番にかつ水
 了んか、いふは、魚を食べ
 魚も鯛か、いふ者かあるか
 他人の衣ふことぬんか

牛肉が食べたこと
 ぬんかあるか

の泣きと泣つてしりやう

余すところなくびつしより添われ入る
かからかうになつて来ぬ雨か吹きつけて来
と却つて傘から顔を隠して雨に向つて口を
けたり松葉を踏んだりし續けたる水かま
た八人の男が一巡病人を背負つてしま
れ私か返つてくること
じんなに病中の上のもの女だ
まことしは腹では
あぐ力なげでもやつとつこと

中興公論

地居老筆

息切れかして来ると眼の前がもろぼろ
とのすんで来腕かじひれる足かふらり
ふらりと中風のやりに泳ぎ出すと舌
を嚙んだり頭を前の傘持ちにぶつたけたりし
續けたる後ろの女か敷へて来る
頃にはもろ病人を近くするのやえそこへ
とらりと振り舞したくなつて来入る水を感じ
つめてはきた泣か小から
してあつたもの
ひる
しなつてしなつて

中興公論

しなつてしなつて

地居老筆

了と、その小がみな誰も眼をさよらさるる所
 へ私を顔と眺めこめるのだ。どししたのだ
 と訊いてみると、こんなところでは女のために
 喧嘩をして傷でもしてはどちらも損なうや
 めやいと相違してやめぬのだから、
 小へ息の根かとりさういふから黙らせてと、
 こころと、
 どちらも賢いことをしたと云つて私を
 へ引を返して病人のある所へ来てやること、
 ちらはまが争ひはこ小かららしく、
 1502

あはれ

下道のよてハ
 名島の脊中の上でわわわ泣いてる病人の
 本と木下が取っ組み合ひをして喰つてつるの
 だ。併し、
 どの男をとつてゐて自分か誰のどの男を取
 つてゐたことになつてゐるのか分らなくたつ
 てゐるのひまじいばんやりして、
 何を言へば、私、
 つたひと訊ねたも、私、
 小へ度は起、
 なたにはおまう、
 1502

あはれ

いの地（か）に今頃之を岸の上で二人は
 突然降つて湯の釜やうに起こるとは思つて
 おどろいたので、**誰か誰か**と喧嘩をし
 やうとそんなことなんか車輪が**誰か**とした
 ところでもたふち**一團**の進行にかけた
 こと重大なうな。ところが八木と木下は前
 から仲も**悪く**ない上に女に引かれてはどつち
 も**競争**し合つておれ男同志のこととして、私が
 仲へ這入るととめやうとしてもおれながら、**放小**
 目さ知るところはな**い**。切つと寝ながら**殿**り合

中央公論

明治三十二年

つておる方が**立**つてあつて病人を背負
 けせ、**心**より**楽**は**楽**なんから、足を絡めり
 合せたまま休息するやうに**殿**り合
 つた。私も二人が傷さへしな**い**。
 木下もい出来るわけ喧嘩してしまつてとく
 方が良いのだから、二人が**轉**じてやう、**聞**私も
 身体を休めるために二人の**腰**に腰を跨りし
 て眺めえつた。木下も**頭**の**所**八木もす
 つかり、**痛**ふらしくどつちもそのまゝ動かせ
 ずなつて吐く息だけをおおむむい**い**てはせぬ

中央公論

明治三十二年

中央公論

胃液が上つて来る。喉が乾く。口の中が苦い。吐き出す。胸が痛む。腹が膨れる。頭が重くなる。目眩。耳鳴。手足が冷たい。顔色が蒼白になる。呼吸が浅くなる。脈が弱くなる。意識が朦朧とする。最終的には昏倒する。

煙草の匂ひのする

治す薬

胃液が上つて来る

胸が痛む

胃液が上つて来る。喉が乾く。口の中が苦い。吐き出す。胸が痛む。腹が膨れる。頭が重くなる。目眩。耳鳴。手足が冷たい。顔色が蒼白になる。呼吸が浅くなる。脈が弱くなる。意識が朦朧とする。最終的には昏倒する。

中央公論

胃液が上つて来る。喉が乾く。口の中が苦い。吐き出す。胸が痛む。腹が膨れる。頭が重くなる。目眩。耳鳴。手足が冷たい。顔色が蒼白になる。呼吸が浅くなる。脈が弱くなる。意識が朦朧とする。最終的には昏倒する。

胃液が上つて来る

胸が痛む

から響くのかゆるめとひかきこい少し休ん
 ていかうではおいかといふこといひつたの
 か、中へ送入ると
 ことかやいと見もい問人加近つた
 えていつけいに張り廻り水は蜘蛛の巣が皆の
 顔はひつかりた。さ、水は可なりほど
 の程か二層敷はと徳具むひひ
 雨を路を渡り
 者が塊を一つと踏つてつると、八木のここ休
 水車小屋のから水かある

中央公論

いふ

たらかひ

給

して泣きまゝにぬいじして
 田んぼに朽ちてつて水車の羽根は白い
 ところから菌か生え上つてつるのかから
 水びんかありさうにも思へない。そのうち
 上塊つてつる者達の肌から汗かかんなん冷え
 小屋の中心へ来ると着物の湿りが癒へて来て
 皆かぶるぶる汗かかると。殊に三時過ぎの秋
 の夜の冷えかかると。肺病と空腹といはつて来
 たのから

中央公論

もう皆は一人つら

小屋の周囲をうろつた

生と死
の間

なまのど封固したり、
 往復の~~...~~の中で、私は首を~~...~~たかひ
 物乗りのかた時間を~~...~~感じ~~...~~た
~~...~~の消える瞬間、~~...~~の瞬間を
 して、~~...~~の瞬間を
 ありと、~~...~~の瞬間を
 見直し、~~...~~の瞬間を
 再び頭を~~...~~の瞬間を

1519
中央公論

中央公論

そんなにも

自分の

私は皆の頭を暴力を振ふやうに殴つて過つ
 へ起るち起るふと、皆の者は殴ら
 小くは驚くばんやりして眼を閉じて口はゆる
 かその不承不承ふらふらと隣り者へよりか
 つてしりふ者や、急死に迫つてわたる目前の
 危儀に命を~~...~~の瞬間を~~...~~たかひ
 くりしてぬる者や、~~...~~の瞬間を~~...~~たかひ
 ものを~~...~~の瞬間を~~...~~たかひ
 へは、~~...~~の瞬間を~~...~~たかひ
 つけ出さず者や、~~...~~の瞬間を~~...~~たかひ

中央公論

羽根の伝つ

休其本論

左水車の傍には成程な静けさがある。始めうんと静か
 静かである隙間から這い込んで来て意識を吸ひ
 取つていつていふの間断なく眼の毛をひ
 つつめんご頭を引を握り上げれば頬つぱた
 を指の跡の残るほどひっぱたいたる青
 膚でそれこそ銀髪を念はせぬほど白く白く
 つらつらしてゐる。眼を閉する動作
 して静かにもう危く一同が死に向つて落ち
 いかにもかたがたの一二分も一致

時辰地誌

中央公論

人の心は、
 なるものと同時に十一人の動作を見詰めてつづ
 けておぼろげにふつとどろいしたるものやらまは
 私の意識も極りなき快樂のうちに
 流れていっていつつらいつらと漂ひ出
 の心。快樂——いつてまことに死の前
 の快樂はど果敢なく豪華かやで玲瓏としてお
 るものは何一つもあらず。まるで水々しい
 果汁を飲めるかやうに感極まつ心はてむ
 せが、
 出す

時辰地誌

一番早く帽子を運ぶに

80

こけるよ

受けて来た水は思ふとあともかむかした

る時を渡してしまつて何の役にも立たぬ

とやつとごころから渡水な

くやつとごころから渡水な

は疑ひなく無くな

了りの

十一人で

運はつて

か

水

それは一番早く来た

月の中に

十一人が三門の間の間に

は日影の間に病人の所へ

水を運ぶ番

とあつて水の本質の待つ

間初帽子の廻つては絶

人を揺り續けつゝる

つゝらから臨み續けつゝ

強し

をくたぐた

81

あつた

眼を解して

